

ワールドカップ 1988—国際会議の舞台裏—(6)

今野 浩 (中央大学)

11. オール・ジャパン 1987

86年初めに設置された実行委員会は、総勢26人のエンジニアで構成されていた。その大半は、RAMPの運営に当たった関東地区の若手研究者である。

メンバーを関東グループに絞ったのは、毎月1回金曜日の夕方に開催される委員会に、旅費・宿泊費も出さずに遠方から出席してもらうのは、現実的とはいえないからである。また若手中心にメンバーを組んだのは、シニア研究者には、ほかにやっていただきたいことがあったからである。

国際シンポジウムを開催するにあたっては、実行委員会のほかに、いくつもの委員会を設置するのが慣例となっている。

まずは国際プログラム委員会。これは世界の有力研究者数十名からなる委員会で、シンポジウムの箔づけに欠かせないものである。

国際プログラム委員会のメンバーは、MITのリストから3年間に物故した人を除き、新たに出現したスター数人を追加したものである。

委員には依頼状を出し、返事がなければ了承が得られたものとする。必要に応じてアドバイスを求めることはあるが、実質的負担をお願いすることはない。

もう1つは国内プログラム委員会で、ここには、実行員会に加わらない有力研究者のすべてに参加していただく。

これらの人に依頼するのは、自分の専門領域の研究者に幅広く声をかけ、4~5件の発表を束ねた“招待セッション”を企画していただくことである。30人の委員が、それぞれ5名程度からなるセッションを企画してくれれば、それだけで150人の参加者が確保されるわけだ。

プログラム委員のもう1つの仕事は、世界各国から集まってくる講演申し込みを仕分けして、最終プログラムを編成することである。この仕事は、講演申し込みを締め切ったあとの数日間に集中する。

シンポジウムの格を高めるために組織されるのが、後藤正夫(参議院議員)、小林宏治(日本電気会長)、近藤次郎(学術会議議長)氏など、学界・産業界の大物9名を揃えた顧問会である。企業への募金依頼に当たって、重要な役割を果たす委員会である。

実行委員会は、プログラム作成以外のすべての仕事を担当するグループである。モントリオールやボストンでの経験から、ある程度のことは想像がついていたが、実際にやるとなると、考えていた以上の仕事があるものだ。

東京には、国際会議の準備を手伝ってくれる会社はいくつもあって、ここに頼めば万事遺漏なく事を進めてくれるのだそうだが、あてになるところに頼むとなると、数百万のお金を用意しなくてはならない。

実行委員会が組織された時点では、募金活動は難航するものと予想されていた。1,900万という数字は、業者への業務委託費を含まない、ギリギリのものである。

したがってすべての計画は、実行委員が負担するという前提の下で組立てられていた。しかし少しばかりの謝礼で、委員のロードが大幅に減るのであれば、利用した方が効率的だ。

そこでわれわれは、募金のめどが立ったところで、業者にアドバイザー役を依頼することにした。依頼内容は実行委員会に出席して、必要に応じて助言してもらうことである(この会社は、少ない謝礼でよく働いてくれた)。

さて実行委員会の仕事は、次の7つに大別される。

1. 広報 論文募集, ポスター作成, 他学会やシンポジウムでの広報, アブストラクト集の編集.
2. 接遇 歓迎パーティーと晩餐会の準備と運営, チケット・招待状の作成, パーティーの招待客の人選, 宿泊施設案内計画, 催し物企画, 会長招宴計画.
3. 会場 各種シンポジウムの見学, 会場運営計画,

- アルバイト（当日）役割分担，アルバイト要員の確保，レストランガイドの作成。
4. 財務 募金状況把握，寄付団体への入金謝礼状，参加者登録費の入金状況の把握，経費の前払い，寄付企業への招待状発送。
 5. 総務 事務局開設，コピー機等の借用確認，登録事務管理，データ入力。
 6. 総括 全体の進捗状況の確認，外国人旅費補助者の選定と招待，事務管理。

これらの仕事を担当する小委員会を設置し，各々1人ずつ主任担当者を選出した。会場と接遇は，シンポジウム直前と当日に仕事が集中するが，それ以外の委員会は，1年前からスタートしないと，MITの轍を踏むことになる。

まずやらなくてはならないのは，会場の選定であるが，この件については1985年時点で，後樂園にある中央大学理工学部キャンパスを（無料で）提供していただけることが決まっていた。これは篠田庄司中央大学理工学部教授の口利きがあったおかげである。

ここなら交通の便もいいし，15以上の教室と400人の講演会場も確保できる。またこのキャンパスは，建物が新しくきれいだ。

次は宿泊施設である。東京在住の人間は，東京に“出張する”機会はない。だからホテルといえば，帝国ホテルやホテルオークラなどの一流どころしか知らないが，都心にはビジネスマン用の安いホテルがたくさんある。そこで旅行社の協力の下で，水道橋・お茶の水・飯田橋周辺のビジネスホテルを大量に手当てした。

料金は8,000円程度だが，ドルに直せば50ドルを超えるから，お金の細かいアメリカ人から苦情が出るかもしれない。

実際88年のはじめには，国際プログラム委員を依頼したジョージア工科大学のロバート・ジェロスロー教授から，“最近日本に旅行した友人から聞いたところでは，東京のホテルは400ドルもするということが，こんなに高くは参加を見送らざるを得ない（何とかしてくれ）”という手紙が届いた。

恐らくその友人は，旅行社に勧められた高級ホテルに泊まったのだろう。バブルに沸く日本では，一流ホテルの料金は高騰していた。そこで80ドルのホテルがあることを伝えたところ，来てくれることになったのだが，そのおかげで私は恐ろしい事件に巻き込まれることになるのである（それについては，あとで詳しく書くことにしよう）。

大事なことは決まったが，やるべきことはたくさんある。そこで87年8月以降は，毎月1回26人の委員に集まっていたが，仕事の進捗状況を報告してもらった。会議の場所は本郷の東京大学工学部，時間は6時から7時45分までである。

会議というものは，時間通りに終わるとは限らないものだが，エンジニアの会議は時間どおりに始まって時間通りに終わる。終了時間を7時45分としたのは，少々遅れても，8時までには絶対に終わらせるためである。

司会役を務める私は，5時45分には会場に到着し，6時00分になったら，人が集まっていなくても開始する。そして報告・協議事項の少なそうな人から順番に報告してもらい，途中厄介な案件が出てきたら，その議論は後回しにする。

他のことを議論している間に，委員諸氏に考えを巡らせていただくと，30分後にこの問題に戻ってきたときには，案外早く決着がつくものである。かくして前後20回に及ぶ会議で，終了時刻が8時以降になったことは，1度か2度しかなかった。

なぜそこまで時間にこだわるのか。それは会議というものは，2時間を超えると効率が落ちるからである。また遠くから（例えば筑波から）来ている人は，終了時間が10分遅れると，家に帰り着くのが1時間近く遅れることがあるから，終了時間が近づくと何となくそわそわしてくる。

あちこちに書いたことだが，工学部の教え第1条は，“時間に遅れるな”である。会議では時間内に決めるべきことは決める。それでうまくいけば，メダタシメダタシ。大体はうまくいく。うまくいかないことが分かったときは，そのときまた議論して，必要なら改める。これが工学部スタイルの会議である。

それにしても実行委員諸氏は，誠に献身的で当てになる人の集まりだった。後日ダンツィク教授から，“これまで（13回）のシンポジウムの中で，最も良くオーガナイズされていた”というおほめの言葉を頂戴したのは，あてになるエンジニアの献身的な努力を考えれば，当然のことだったのである。

12. 招待客

シンポジウムでの研究発表には，次の3種類がある。1つ目は，主催者の招待で行われる“特別講演”，2つ目が，内外の有力者に企画してもらった招待発表，そして3つ目が，世界各地の研究者による一般発表である。

一般発表の件数が多すぎる場合には、事前審査によってお引き取りを願うこともあるが、このシンポジウムの場合、申込み件数が1千件を上回るようなことはないので、すべてを受け入れるのが慣例となっている。

特別講演は、1日につき2件か3件、全体で十数件で、講演者は主要な分野で、過去数年の間に顕著な業績を挙げた人の中から選ばれる。人選にあたるのは国内プログラム委員会であるが、優れた研究者であっても問題を起こしそうな人……例えば傲慢なカーマーカーや、奇人の誉れ高いJ.E.教授など……は除外される。

プログラム委員会は、特別講演者に事前に刷上がり20~30ページのテキストを用意してもらい、これをもとに編集した本『数理計画法：最近の展望と応用』を参加者全員に配布する計画を立て、十数名の有力研究者に講演依頼を行った。

本の出版を引き受ける側としては、参加者800人分を買い取ってもらえる上に、市場でも売れるのだからおいしい話である。

ところが最初に話を持ちかけた本屋は、1冊4,000円という買い取り値段を要求してきた。これは予算の倍近い価格である。最終的には、外資系大手出版社が、2,500円で引き受けてくれたが、内容的に見て、100ドルの値段をつけても1,000部くらいは売れると踏んだからだろう。

招待セッションは、特定の研究者にすべてお任せするセッションだから、“まともな”人に企画を頼むことが肝心である。まともな人は、まともな人を集めてくれるから、心配はいらない。

問題は一般セッションである。ここには世界各地から、(半透明人間を含む)種々雑多な人が発表を申し込んでくるのだが、中には当日姿を見せない人……これをno show族という……が含まれている。

学会によっては、これが20%を超える場合もある。定められた期日までに登録料を納めた上で、実際には来なかった人には、手数料を差し引いて返却するのだが、これにはかなり手間がかかる。

ノーショウ族の中には、研究費獲得に失敗した人(実績のある研究者でも、運が悪いと研究費を取り損なうこともある)、出発直前に本人または家族が病気になるケースが多い。

またはじめから来る気がなくせに、講演申し込みをして研究実績を稼ごうとする人もいる。ひとたびプログラムに名前を載せてもらえば、実際に出席しなくても、研究発表をしたことにすることも可能なの

だそうだ。

しかし発表申し込みをしてきた段階で、“本当に来てくれますか?”なんて聞くわけにもいかない。“来られなくなったら、なるべく早く知らせて下さいね”，と頼むのが精一杯である。

では、当日発表者が現われなかったときにはどうするか。4人のセッションに座長しかいないエンペティ・セッションは、2,000人以上が集まる大規模学会の場合には、よく見かける光景である。

このシンポジウムは、従来ノーショウ率は低く保たれてきたが、それでもアフリカのU国や中東のI国の研究者は、ノーショウになる確率が高い。そこでプログラム委員会では、このような研究者を、金曜の午後に設定したノーショウ・セッションに、まとめて収容することにした。

すでに書いたように、金曜は参加者が減るから、ノーショウ・ノー聴衆なら、困るのは座長だけである(そうなることを予想したセッションだから、実行委員の誰かもしくは大学院生を張り付けておけばいい)。

困るのは座長1人発表者1人、聴衆が2人というような場合だが、まともな研究者であれば、金曜日にU国とI国の無名研究者3人と同じセッションにはめこまれたら、事前に文句を言ってくるから、やはり問題は起こらないのである。

最後は、そして最も手間のかかるのは、海外出張の予算が取りにくい国の有力研究者、具体的に言えば、ソ連、ハンガリーなどの共産圏の有力研究者を、実行委員会の費用で招待するケースである(MITの理事会で問題になった、ハンガリーの恵まれないユダヤ人うんぬんはこれである)。

今回のシンポジウムでは、当初ハンガリーから2人、ソ連、チェコ、ポーランド、中国からそれぞれ1人ずつの、合計6人を招待することになっていた。共産圏の人はビザを取るのに時間がかかるから、早目に招待状を出すのが肝心である。ところが88年4月になって、ソ連から急きょもう1人を招待することになった。

この発端は、88年1月初め、イルクーツクにあるシベリア・エネルギー研究所のI. I. Dikin博士が、Mathematical Programming誌の編集長を務める、コーネル大学のマイケル・トッド教授に送りつけた手紙である。“カーマーカーのアフィン変換法は、私が1967年に発表して、実際に使用してきた方法と同一である。”

西側諸国の研究者の画期的業績に対して、“そんな

ことは昔から分かっていた”と東側がイチャモンをつけるのは、古くから良く聞く話である。

しかしトッド教授は、同封されていた論文を詳しく吟味したうえで、2月初めに全世界の研究者に対して、「カーマーカーのアフィン変換法は、ディキン法と同一である。したがって、アフィン変換法の発明者としては、今後ディキン氏の名前を加えて「ディキン＝カーマーカー法」と呼ぶべきことを、ここに宣言する」という手紙を送付した。

ディキンはカーマーカーより17年も前に、同じことをやっていたのである。天網恢恢疎にして漏らさず、とはこのことだ。

数学の研究にはお金がかからないから、世界中どこにでも研究者が居るのである。このニュースを聞いて、カーマーカーに反感を持っていた研究者は色めき立った。

ところがその3カ月後の1988年5月に、米国特許商標庁は、カーマーカーとAT&Tが申請していたアフィン変換法(実はディキン法)に、特許を付与した。

1984年にカーマーカー法が発表されたとき、“従来の方法より50倍から100倍速い方法出現”と書いたニューヨーク・タイムズは、再び一面に「数学に特許成立！」という記事を載せた。

伝統的に特許の対象とはしないことになってきた数学に特許！ しかも17年も前に提案されていた、新規性のない方法に特許という事態に、研究者は憤慨した。こんなことがあっていいはずはない。

私とカーマーカー特許との、15年にわたる戦いがここに幕を開けたのである(この事件のテンマツについては『カーマーカー特許とソフトウェア』(中公新書、1995)と『特許ビジネスはどこに行くのか』(岩波書店、2002)に詳しく書いたので、そちらを参照していただくことにしよう)。

このような状況の中で、実行委員の間でディキンを招待しようという声が上がった。トッド教授はじめとする有力研究者も、それを望んでいた。

ディキン博士の来日の実現すれば、実行委員会の勲章になる。またすでに来ることが確定しているカーマーカーとの対決に、ジャーナリズムも関心を持つだろう。

ディキン博士あてに招待状を発送したとき、シンポ

ジウム開催まですでに3カ月を切っていた。ところが2週間後に届いた返事には、厄介なことが書いてあった。

“自分としては喜んで行きたいと思っているが、上司の承諾が得られないので苦慮している。もし上司も一緒に招待してくれるのであれば、話を通しやすい。”

こんなことは、ソ連では日常茶飯事だということは知っていたが、研究実績のない人を実行委員会の費用で招待するのはいかがなものか。2人を招待する費用は工面できない、という手紙を出したが、その後全く連絡がない。もう1週間待って返事がなければ、2人招待もやむなしという意見に傾いたところ、6月半ばになって、上司からOKが出たという連絡が届いた。

やれやれと思ったが、ここにもう1つ難問があった。ビザの申請である。外務省の窓口書類を出しに行ったところ、発給までに6週間かかるというのである。つまりビザが出るのは、8月半ばになるということだ。その書類をシベリアに送り、本人が日本大使館で手続きをするわけだが、果たして間に合うか？

実はこのとき私は、もう1つのビザ問題を抱えていた。ベトナムの超人ホアン・トイ教授の招待が決まったのだが、こちらは国交がないため、ソ連以上に厳しい審査がある。外務省の入国管理事務所に問い合わせると、もう1カ月近くかかるという。

実行委員会としては、何としてでもディキン来日を実現させたい。しかし私にとっては、トイ教授の招待はより重要な意味を持っていた。

留学時代に、私が博士論文を完成させることができたのは、1964年にトイ教授がDoklady誌に発表した論文のおかげである。たった2ページの論文だったが、そこには画期的なアイデアが盛り込まれていた。

募金が順調に進み、資金に余裕ができたところで、招待客を1~2名増やすことが可能となったので、急ぎょこの人を招待することが決まったのだが、ディキン博士もトイ教授も、訪日が危ぶまれる状態になってしまった。かくなる上は、これまで使ったことのない、「ウルトラC」戦略を発動させるしかない――。

この戦略を、ここで明かすことができないのは残念だが、ギリギリでビザが発給された結果、数理計画法の新しい時代を開いた2人の巨人が、はじめて西側世界に姿を現すことになったのである。